

## 「故郷の味、おふくろの味」

明星学園 宮下 智

『故郷の味』とか『おふくろの味』なんて言われる言葉がある。不思議なものでしばらく食べないでいると、妙に食べたくなったり、寂しい気持ちの時なんかには食べると妙にホッとしたりする。何処かの誰かと（何かと）つながった感じがして、やさしい気持ちになれるのだろう。もちろん人それぞれ生きてきた歴史が違うのだから、選ばれるメニューは個々に違うのだろうが、信州人だったら『ふるさとの味』が蕎麦だったり、一昔前だったら漬け物や味噌汁が『おふくろの味』だなんていう人はかなり多かったのではないだろうかと思ったりする。

もう十年以上前のことだがこんなことがあった。T男さんの手を噛む自傷が止まらないのである。ちょうど今度の帰省で何をお母さんに作ってもらおうかの相談時である。もちろん一言もしゃべることができない彼であるので、職員の観察力と想像力だけが頼りのやりとりである。結局を何を尋ねても彼からはYESの返事が戻らず、職員は途方に暮れた。しかし、追い詰められれば人間の記憶も蘇る。何処かで母親が確か手作りのうどんが得意だと言っていたのを思い出したのだ。彼にもう一度尋ねる。「あのさあ、T男さん、確かお母さん、手作りうどん得意だったよね。ひょっとして今度お家に帰った時に食べたいのは、お母さんの手作りうどんなの？」彼の体はさっと緩み、ニコッと笑って自傷が止まった。

そのことを母親に伝えると、「そういえば昔よく作ったねえ。T男、大好きなのよね。そういえば最近作ってなかったねえ。ちょっと手間がかかるからね」そんな答えが返ってきた。

確かそのちょっと後だと思うのだけどこんなこともあった。K子さんが帰省を前にして、服を噛み、破ってしまうことが止まらないのである。この時も何を聞いても駄目、一日に何枚もの服が犠牲になった。そのうちに胸を掻きむしるような自傷が始まった。この自傷の形は初めてだった。彼女の伝えたい思い、伝わらない苦しさは極限まで来ていた。担当職員がもう一度彼女が好きそうなメニューを上げていった。「パン？」と聞いた時彼女がかすかに笑った。「そうなの？じゃあサンドイッチ？」これで彼女の体の力が抜けた。母親に電話した。母親はこう答えた。「サンドイッチねえ。卵サンド大好きですよ。そう言えば最近作ってなかったねえ。ちょっと手間なのよねえ」これで彼女の自傷も服破きも止まった。

T男さんにとっての手作りうどん、K子さんにとっての卵サンドイッチ、ともに『おふくろの味』なのである。さらに、ちょっと手間がかかるところが『おふくろの味』の『おふくろの味』ゆえんなのだ。

そういえば、A子さんのおふくろの味は、おはぎとソーメンだったし、Y男さんにとっては白菜の漬物だった。帰省が遠いA子さん、T男さん、母親に面会時に持参してもらっては、少しずつ宝物のようにして食べた。精神安定剤なんかよりもはるかに心に効く心の栄養剤だった。

一方『故郷の味』にはこんなエピソードがある。

M子さん、お盆を前にして大声が止まらない。昨年まで必ず帰省していたお盆の帰省が、今年は母親の入院で無くなってしまったのである。「バス！バス！」と大声を上げ続けている。彼女の帰省はいつも高速バスに乗ってなのである。そう、もちろん原因は家に帰れない、母親に会えない寂しさにある。そこで考えた。彼女の故郷はS市、ぶどうの名産地だ。さっそくぶどうを買い込んできて、毎食のようにデザートにと、ぶどうを食べ続けた。眠ることができない夜には冷凍庫で冷やしたものを飴のようにしてなめた。その後、彼女の大声は聞かれることがなかった。

\* \* \* \* \*

食べ物とは不思議なものだ。単なる体のエネルギーだけを補給するためのものではないようだ。エネルギーとなる糖分や蛋白質を吸収するだけでなく、どうやら同時に【愛情】や【人間関係】をも吸収するらしい。

手作りうどんや手作りサンドイッチには、母親に愛された（大切にされた）記憶が付着しているのだろう。そのときの美味しかった快感、母親や父親の笑顔、家族としてのほんわかな一体感や安心感、全てが付着しているのに違いない。手作り料理を食べる時、その全てを体が吸収しているのだろう。だから穏やかな満足した気分になれる

のだ。

同じような効能は、一般的に家族を連想させるような料理にも感じることができる。家族みんなでつく鍋料理、みんなで分け合って食べる誕生日のホールケーキ、家族揃って食べるお雑煮、たこ焼き、ホットケーキ、そしてバーベキュー（焼き肉）。ポジティブな家族団欒のイメージがそれらの料理に付着しているのだ。だから実際に家族と食べなくても（したくてもそれが不可能であるという環境に置かれている方々はいっぱいいる）、職員と食べるだけでも十分家族を味わうことができるのだ。

\* \* \* \* \*

K男さん、父も母ももうすでにこの世にはいない。叱られればなしかった人生に家族団欒の経験の薄いことが想像された。おそらく家族が揃ってもホッとした安心感はそのこには乏しかったのだろう。

ある時彼は、外出でたこ焼きを買ってきた。そしてそのたこ焼きを職員に振る舞った。職員はピンと感じた。これは、彼に今まで乏しかった家族団欒を自分で埋め合わせようとする努力なのではないかと。それから三年、今ではたこ焼きは彼にとってかけがえのない幸せ獲得ツールだ。寂しいときにもたこ焼き、新しい出会いの職員ともたこ焼き、さらに仲良く仲間としてやっていこうという時にもたこ焼き、昭和の時代、「なにはなくても江戸むらさき」なんていう桃屋のCMがありました（古い？）K男さんにとっては、なにはなくてもたこ焼きなのです。

S男さんにはこんなことがあった。同じようにS男さんの成育歴からは家族団欒の経験が乏しいように感じた。5年ほど前に車椅子生活になってからは、本人は家庭の負担を考えて帰省を見送っていてさらに団欒は不足しているように感じられた。そこで提供した支援は、週に一回日曜日の昼食を休憩で昼食をとっている職員と一緒に食べるという方法だ。団欒の時間と称した。彼は当初急いで食べて、あっという間にその時間を終わりにしたかった。そのうちにゆっくりと職員と過ごすことができるようになる。そして、うっかり職員が団欒の時間の実施を忘れてしまうと大きな声を出しながら反復的な行動をすることでそれを教えた。S男さんは、超がつくほどの偏食の持ち主で、給食メニューのほとんどを食べることができない方なのだったのだが（それを三十年以上も続けていた）、次第に偏食が緩みだし職員の食べている給食のメニューに手が出るようになって、今では多くの給食メニューを食べるようになった。家族団欒の雰囲気の中での食事が、偏食を変えたという事例だと今では思っている。

ホットケーキも魔法の食べ物だ。まさに甘え感たっぷりのメニューである。まずは柔らかい、そして甘い、そして手作り・・・その人気が高い証拠にたくさんの絵本が時代を越えてベストセラーになっている。古くは「ちびくろサンボ」そして「ぐりとぐら」、それに「しろくまちゃんのホットケーキ」、いずれも発刊以来四十年を越えるベストセラーだ。

一緒にホットケーキを作り、一緒に食べて、残りは皆に分配する。この共有という経験が、団欒気分と相まって心の豊かさを育んでいるようだ。仲間、友達、そんな気持ちを醸成することができる。

E男さん、多くの職員と特に女性職員とホットケーキ作りを経験することで、幼い時に亡くした母親との間で育んで来ることができなかつた愛着を補っているかのようだ。N男さん、母親とホットケーキを一緒に作ることによって、今ある自分をそのあるがままを母親とともに受け入れる作業をしているようだ。

人生は愛着という土台に支えられている。これは定型発達者であっても知的障がい者であっても変わらない真実だ。しかし残念なことに知的障がいのある方々は、この不足があった時に自分一人でそれを埋め合わせることができる手立てを講じることができないことが多い。そんな時に大いに役立つのが食事である。たかが食事と思わないで欲しい。愛着という心の栄養剤をとっていると思って欲しいのである。

WELCOME TO SATORU WORLD

障がい者支援施設 明星学園における心のケア

<http://homepage3.nifty.com/myojo-satoru/>